

## まえがき

名古屋大学年代測定総合研究センターの創設から4年が経過しようとしています。この4年目（平成15年度）は、法人化に向けてのステップの年であったに留まらず、本センターの節目の年でもありました。まず、平成14年度から引き継いだ中期目標・計画の策定を完了して、16年度からの年代測定総合研究センターのあるべき姿と行動計画を明確にしました。平成15年度は、弥生時代の年代論との関わりで、加速器質量分析計を用いた炭素14年代測定が、より一層、社会的関心を集めた年でもありました。これに対して、本センターは大学院文学研究科考古学研究室と共同して、 $^{14}\text{C}$ 年代測定と考古学編年を主要テーマとした「第5回考古科学シンポジウム」（平成15年11月22日）を開催しました。さらに、15年度は、年代測定総合研究センターが文部科学省21世紀COEプログラム「太陽・地球・生命圏相互作用系の変動学」と「同位体が拓く未来—同位体科学の基盤から応用まで—」の2つに参画して、その存在感を学内外に示した年でもありました。

通常の研究活動では、タンデトロン年代研究分野が、2台の加速器質量分析計を用いて環境中に存在する天然 $^{14}\text{C}$ の濃度を測定して、考古学・地球科学・環境学を始めとして人文科学から自然科学にわたる幅広い分野での年代測定と $^{14}\text{C}$ トレーサー研究を展開するとともに、新しい核種の加速器質量分析研究を実施しました。新核種の加速器質量分析研究は長期的に取り組むべき重要課題です。新年代測定法開発研究分野は、CHIME法を駆使して地球誕生までの過去46億年の地球史解析の共同利用研究を展開するとともに、K-Ar年代測定システムの構築研究を実施しました。試作K-Ar年代測定装置は、各種分析装置の部品を寄せ集めておりますので実用レベルの性能に達するかどうか不明ですが、平成16年度末のfirst fireを目指しております。

自己点検・評価の一環として、毎年一回、年度末に実施しているタンデトロン加速器質量分析計シンポジウムも16回目になり、1月22日と23日にシンポジオンホールで開催しました。この学際シンポジウムでは、研究者や学生のほか、一般からの参加者も含めた89名の出席者を前に、2件の特別講演と21件の一般講演が行われました。その講演内容を含めた論文集を、名古屋大学加速器質量分析計業績報告書（XV）として刊行するのはこびとなり、ご協力いただいた関係各位に厚く感謝いたします。

この4月から、国立大学法人名古屋大学の学内共同利用教育研究施設となります。年代測定総合研究センターは、新たな年代測定法を開発しつつ、COEとして国内外から高く評価される研究成果をあげる必要があります。関係各位の一層のご支援・ご協力をお願いする次第です。

名古屋大学年代測定総合研究センター長  
鈴木和博